読書ノート　　　　　　　　　　　　　　　　　2016.9.19/小林

コンプライアンス違反事例

オリンパス不正経理事件（山口義正「サムライと愚者－暗闘オリンパス事件」（講談社、2012年3月））

* 別紙参照
* 発覚の経緯:2010年以降業績悪化、2011年4月、経営手腕をかわれてｵﾘﾝﾊﾟｽUKの英国人社長を本社社長に抜擢。直後に経理部員の内部告発で雑誌「FACTA」に「ｵﾘﾝﾊﾟｽの不正経理疑惑」が出て（本書著者の記事）、英国人社長はその真相を解明しようとしたが会長（前の社長）一派とのバトルになり6ヶ月後には取役会にて代取解任動議可決、会長が代取社長に復帰するというﾄﾞﾀﾊﾞﾀ劇があり、不正経理疑惑の続報もあり、株価急落、追い詰められたｵﾘﾝﾊﾟｽは不正経理を認めた。→前社長その他は逮捕・有罪、なお元・野村証券の外部ｺﾝｻﾙも逮捕・有罪
* なお、本件の関係で2012年7月、新日本/あずさ監査法人は「監査不適切」として金融庁から業務改善命令が出た。
* 不正経理の概要：有価証券評価損を「飛ばし」て→のれん代に姿を変えて→のれん代を20年償却して→損失をｿﾌﾄﾗﾝﾃﾞｨﾝｸﾞさせる、というシナリオ
* 背景：ﾊﾞﾌﾞﾙ期(1986-91年)にM&Aで株式投資、ﾊﾞﾌﾞﾙがはじけて相場下落、かつ取得原価方式から時価評価に会計ﾙｰﾙ変更されたため巨額の評価損が出たが、業績悪化を恐れた歴代社長その他役員・幹部は不正取引・不正経理を実行して損失隠しを続けた

日本の文化

1. 神道における死後の世界（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄと図書館の書籍より）

* 「高天原」（ﾀｶﾏｶﾞﾊﾗ）は天上にある神々の国であり、天国のような死者がいく死後の世界だとの説明はない
* 相撲力士がシコを踏むのは地下にひそむ悪霊を鎮めるためだが、地下に地獄のような死後の世界があるとの説明は見あたらない
* 神道の葬式は神社ではおこなわれない、死はケガレなので神社では葬式をしない、死をケガレと考えるのは死体が腐敗することからそのように考えたといわれている、「古事記」の中の神話では「黄泉（ﾖﾐ）の国」にいる死んだ妻のｲｻﾞﾅﾐﾉﾐｺﾄからウジがわいている様子が描かれている
* 神道の葬式は死者の霊を家にとどめて家･子孫の守護神にする儀式、神道という多神教の世界では死者の霊が守護神として自宅に居続けると考えるので死者を身近に感じ生きているような感覚で扱う→ﾚｽﾘﾝｸﾞ吉田沙保里のことば
* 神道では仏教･ｷﾘｽﾄ教とちがい魂の救いや死後の安息を願うことはない、はっきりとは書いてないがどんな人間でも神道で葬式をすれば死者の霊は守護神になるのであろう、したがってことさら「魂の救い」を願う必要がないのであろう、悪事をすると死後に何かしらの不利益・苦痛を受けるという考え方は見あたらない

1. 土居健郎「甘えの構造」（弘文堂、1971年）

* 精神科医である著者が多くの患者の観察から甘えるという心理が日本人特有の心理と深い関係があるのではないかと気づいたことからこれを研究し、本書を発表したことで注目をあつめた。著者は「日本の精神医学を築いた人々」のなかの一人として専門誌『臨床精神医学』2015年4月号で業績が紹介されている。
* 「甘え」を、その心理が典型的にみられる親子関係で説明するː子どもが母親に「ねえ、おおもちゃ買って」とねだるのは、甘えである。子どもとして買ってもらえるかもしれないと期待があるから甘えてねだる。母親も子どもに甘える。「ママのお手伝いをしてくれるんなら買ってあげる」と母親も子どもからの好意＝お手伝いを期待する。甘えの心理は、日本人の意識を形成しており、いたるところで見ることができる。以下はその例。
* まず日本語に「甘え」に関連した語彙が豊富にある、これは「甘え」の意識が語彙を豊富にしたということ：味覚の甘い、採点が甘い、ネジが甘い、甘んじて、甘ったれ、甘ったるい、甘ちゃん、甘やかす、甘えん坊、甘っちょろい、栗の甘皮、甘噛み、甘言をもってだます、など
* 子どもが通う学校の先生に親が「お世話になっています、我が子をよろしく」などと挨拶するのも親子間の相互の甘えにより親･子の自我が同一化しているから、欧米の親は子どもの先生と既知の関係であれば挨拶するが、子どもが先生と話をしていても親がしゃしゃり出て「この子の親です、お世話になっています」などと挨拶することはない。子どもに紹介されれば、「Nice to meet you」と言うくらい、既知の関係であれば挨拶はする
* 子どもの悪行に親が謝罪するのは親子相互の甘えにより親･子の自我が同一化しているから、欧米の親は謝らない、子どもに謝らせる（女優･高畑淳子が息子の犯罪で謝罪したのは親･子の自我が同一化しており日本人の典型）
* 甘えの関係にある人どうしでは、すこしぐらいの悪事はゆるされるだろうという心理が働く、上司･部下が甘えの関係にあると上司は部下の不祥事に甘くなる、強く言えない→ ゆでカエル状態→ 重大事故･重大不祥事
* 日本人が容易に謝罪するのは、ゆるしてもらえるという相手に対する甘えの期待があるから、つまり謝罪という甘えに対してゆるすという甘えで返してくれると期待する、欧米人はなかなかI’m sorryと言わない、言ったら責任を認めたことになり「じゃあ責任をとれ」と言われ余計にゆるしてもらえなくなる
* 甘えの態度を拒絶されると裏切られたという被害者意識を強く感じる

1. 牧野成一「ウチとソトの言語文化学－文法を文化で切る」（アルク、1996年12月）

* 早大英文卒、同修士、東大言語卒、同修士、ｲﾘﾉｲ大准教授、ﾌﾟﾘﾝｽﾄﾝ大教授・名誉教授
* 自分の家（いえ）のことを「ウチ」という。家のまわりを塀で囲みウチとソトの境界をはっきりさせる、米国のTVドラマに出てくる家にはほとんど塀がない
* ウチから出ていくとき・ソトから帰ってきたときに言う挨拶ことばがある（いってきます、いってらっしゃい・ただいま、おかえりなさい）、自分の勤めている会社（ウチ）から社外のどこか（ソト）に行くときも同様の挨拶ことばをいう、欧米語に類似の挨拶ことばはない。
* ウチ空間を構成する「わたしとあなた」における「わたし」と「あなた」を表す単語が豊富にある：わたし、わたくし、ぼく、おれ、うち（関西弁）、拙者、我、みども、わらわ等々・あなた、君、おまえ、てめｴ、お手前、おまえ様、貴殿、貴方、そち、あんさん（関西弁）等々。
* これに対して三人称（ソトの人間）を表す単語はやまと言葉には存在せず、明治時代に作られた「彼」と「彼女」があるのみ（複数形は「彼ら」、「彼たち」、「彼女ら」、「彼女たち」）。
* 「福はウチ、鬼はソト」、鬼はソトにいるならいてもよい。西洋の悪魔は存在自体が忌み嫌われる。
* ウチ・ソトの文化は単にウチとソトを峻別するだけでなく、ウチとソトを峻別することから様々なことが派生する。たとえば、

(1)ソトの目（世間体）を気にする

(2)室内服と外出服の差が大きい（ｼﾞｬｰｼﾞと高級ﾌﾞﾗﾝﾄﾞもの、サラリーマンの休日の服装など）、

(3)ソトのものを小さくしてウチの中に持ち込もうとする（盆栽、盆景、盆石）、

(4)ウチに持ち込んでよく見ようとするため視覚を重視する（飲食店の食品サンプル、アニメ文化など）、

(5)外国語（ソトのもの）を学習する場合、視覚＝読み書きを重視する、聴覚＝話す聞くを軽視する、日本の伝統芸能で音楽は未発達だが浮世絵･日本画は世界的に評価されている、これは日本の文化が視覚重視・聴覚軽視のためか。

(6)ウチの人間どうしの連帯意識が強化されやすく、その一方でソトの世界に対して関心がうすい＝ムラ意識・ムラ社会ː世間の目は気にするが世間に対して関心がうすい→このウチ向きの連帯意識の強さは企業においては不祥事の温床になりやすいのであろう、また不祥事が露見した場合ウチ向きの連帯意識は組織防衛のための隠ぺいに走る傾向があるのではないか

会田雄次の著作三冊

1. 会田雄次「日本人の精神構造」（PHP研究所、2003年2月・原著ː学習研究社、1972年）

* 京大西洋史学卒、京大教授･名誉教授、1997年没、ｲﾀﾘｱ･ﾙﾈｻﾝｽ史、日本/日本人論の関係で著書多数、陸軍兵士としてビルマで極限状態を経験し二年間の捕虜生活も経験。本書はなぜか「軍人勅諭」の逐条解説の形をとっているが、内容は思想的偏向のない日本人論になっている。以下は特に日本の文化に関係する点のみ。
* 武士階級は文化を創造しなかった、軍人も同様、西欧では職業軍人はインテリと見なされているが日本の職業軍人は違う、日本の職業軍人から小説家、絵描き等の文化人が出てきていない、西欧には多数いる→俵木・前回報告の軍人勅諭で軍人が知性を軽視するようになったとの説と通じるものあり
* TV番組に必ず時代モノがあるのは日本人が武士道にあこがれているから、武士道へのあこがれがあるのは明治以降に近代的支配階級であるブルジョワジーの倫理観がほとんど整備されなかったことが原因であろう
* 現代でも尊ばれている「仁義を重んじ、友情を重んじ、約束を守り、行いをつつしむこと」は武士道に根源がある
* 日本の稲作農業は北限地のため丹精を込めて稲を育てる必要から女性的な資質が要求された、努力の積み重ねが徳目とされたことからそれを「ねぎらう」・「なぐさめる」言葉が生まれたː「お疲れさま」「ご苦労さま」＝プロセスを評価することば→成果主義は日本文化に適さないということか、プロセス重視が心情的には合うのか
* 「菊と刀」で言われている「日本は恥の文化・欧米は罪の文化」に賛同するが、「罪の文化」の背景には「罰」の意識があることを日本人は見落としている、「最後の審判」で永遠の肉体的苦痛が与えられることへの恐れがあるから「罪の文化」が成り立っている（そういえば日本にも「悪事をするとばちが当たる」という因果応報の思想があると思うがｷﾘｽﾄ教の罪と罰の思想とどう違うのか？）

1. 会田雄次「アーロン収容所」（中央文庫、1973年11月）

* 本書はビルマの英国軍の捕虜収容所での約二年間の回顧録、以下は関係ありそうなところだけ
* 筆者も含め日本人捕虜は組織的に英国軍の物資を盗んでいた、今でも罪悪感はないとのこと、ただし捕虜への食糧配給が１日米１合（砂混合）という極限状態であった、「武士は食わねど高楊枝」とはいかなかった
* 英国軍の階級は社会での階級と連動している→これだと入隊前のアイデンティティを保ちやすいか、日本軍の階級はだれであれ新兵は二等兵→これだと入隊前のアイデンティティが保ちにくいか、ちなみに著者は京大卒業後に講師のときに入隊し終戦時点で一等兵
* 日本人兵士が英国軍兵士に侵略をわびると、英国軍兵士はキッとなって「信念をもって戦争したのなら謝るべきではない、おまえは奴隷か！」→日本人は甘えの構造で簡単に謝罪したのに対して一神教文化の英国人つまり唯一絶対の価値を信じる英国人はその謝罪を「信念を曲げた」ととらえ反発したのであろう

1. 会田雄次「ルネサンス」（講談社現代新書、1973年7月）

* 本書は(1)イタリアを中心とするルネサンス文化の歴史、(2)それと同時期にポルトガル・スペインで発生した大航海時代、そして(3)同時期にドイツ・スイスで起きた宗教改革の歴史についての概説書、西洋史の三大イベントが一冊でわかる。以下は目から鱗だった部分
* プロテスタントの倫理について：（１）16世紀には北方ヨーロッパ（英独蘭など）では農民から領主への地代の支払が以前は労働納付（強制労働）から物納になりさらにこの時期には金銭納付になったことで農民は領主から解放され自立していった、（2）それとともに農業生産は増加したことで余剰生産物を売るための商業が発達し、これにより農民は**金銭追求**を肯定する現実性を身に付けることになった、また**金銭追求**をなりわいとする商人層が力をつけていった、（3）北方ヨーロッパは農業・牧畜・森林地帯から成りその生産品は穀物、肉魚類、羊毛、材木が主であり、これらは生活必需品のため投機性は乏しく生産量をふやすのは自分の努力だけであり、ここから**勤労と禁欲**が彼らの倫理観となった、（4）このような金銭追求を肯定し勤労と禁欲の倫理観をもった人間がプロテスタント特にカルヴｧン派ﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾄの信者になった。（5）ﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾄの考えでは信者と神が直接の契約でむすばれるため職業も神から与えられた使命＝天職と認識されるようになり、特にカルヴｧンはその天職にはげむ中で「神の救い」に対する確信を見いだせと説いた、ｶﾙｳﾞｧﾝ派ﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾄは英国等々に広まり資本主義発展の精神的背景になった
* 上記によれば16世紀の北方ﾖｰﾛｯﾊﾟに金銭追求・勤労・禁欲の倫理観を身につけた人々が生じ、彼らがﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾄの信者になったとのこと。わたしは逆に理解していた、つまり金銭追求・勤労・禁欲の倫理観を身につけていなかった人々がﾌﾟﾛﾃｽﾀﾝﾄに入信したことではじめてそのような倫理観を身につけたと思っていた（ﾏｯｸｽ・ｳｪｰﾊﾞｰは？）

前回の俵木浩太郎「新・武士道論」にひきつづき

俵木浩太郎「文明と野蛮の衝突－新･文明論之概略」（ちくま新書、2001年11月）

* 本書は1998年のベストセラー「文明の衝突」（ｻﾐｭｴﾙ･P・ﾊﾝﾁｨﾝﾄﾝ）に刺激されて書かれたかと思われる、「文明の衝突」は戦後政治の対立軸は自由主義vs共産主義だったが、ソ連崩壊後の国際政治は文明vs文明が対立軸になると説く、なお世界には七つの文明ありː西洋・ｷﾘｽﾄ正教・イスラム・ヒンドゥー・ｲｽﾗﾑﾋﾝﾄﾞｩｰ・アフリカ・ラテンアメリカ・中華・仏教・日本
* 本書の執筆完了直前に9.11世界貿易ｾﾝﾀｰﾋﾞﾙ航空機テロ事件が発生
* 福沢諭吉「文明論之概略」（明治8年発刊）の概要の概要：(1)歴史は「野蛮から文明への発展の歴史」ととらえ、(2)文明の本質を国民一人々の智徳（ｲﾝﾃﾚｸﾄとﾓﾗﾙ）ととらえ、(3)個人々に智徳があってはじめて国の文明が進歩し科学技術が進歩し政治・国家が進歩すると説き、(4)日本は「文明国」になるべきという明治国家の方向性を提示した。
* 現在起きている「ｲｽﾗｴﾙとﾊﾟﾚｽﾁﾅの戦争」も「欧米とｲｽﾗﾑ過激派の戦争」も一神教国家どうしの争い、つまり「ﾕﾀﾞﾔ教とｲｽﾗﾑ教」、「ｷﾘｽﾄ教とｲｽﾗﾑ教」
* ｲｽﾗﾑ教という宗教は根っこがﾕﾀﾞﾔ教とｷﾘｽﾄ教と同じ＝三宗教同根、つまりﾕﾀﾞﾔ教とｷﾘｽﾄ教の聖典である旧約聖書はｲｽﾗﾑ教においても「神の啓示を記した書物」であると認められている（聖典とはいっていないが）
* ｲｽﾗﾑ教は両宗教の影響を強く受けて西暦600年代にムハンマドが創始した宗教、ちなみにﾑﾊﾝﾏﾄﾞはサウジアラビア西部のメッカで誕生
* したがって、ｲｽﾗﾑ教の聖典であるコーラン（正しくは「クルアーン」）は旧約聖書と共通部分あり、ｺｰﾗﾝにはｲｴｽ・ｷﾘｽﾄは「預言者」として登場する、ちなみにﾑﾊﾝﾏﾄﾞも預言者＝神の言葉を神から預かって人々に伝える者（予言者ではない）
* 旧約聖書に描かれているﾕﾀﾞﾔ教創始にまつわる物語「出エジプト記」は日本人には驚くほどの野蛮な行為をおこないながらｴｼﾞﾌﾟﾄを脱出する物語、同根のｲｽﾗﾑ教も野蛮性を引き継いでいる、当然ｷﾘｽﾄ教も野蛮性を引き継いでいる
* ﾕﾀﾞﾔ教の創始は十戒（汝ひとを殺すことなかれ、等）をさずけられたモーセが奴隷にされているﾕﾀﾞﾔ人を引き連れてｴｼﾞﾌﾟﾄから脱出してカナン（ｲｽﾗｴﾙ周辺地域）に行き、そこでﾓｰｾが神ヤハウェと契約（the Covenant）することでﾕﾀﾞﾔ教が創始された、ﾓｰｾ率いるﾕﾀﾞﾔ人奴隷集団は殺戮と略奪をしつつ脱出していく、日本人がｲﾒｰｼﾞする「奴隷の逃亡」は夜陰に乗じてこっそりとだが、遊牧民族としてのﾕﾀﾞﾔ人の逃亡は定住農耕民族の文化とは異質
* なぜなら「遊牧」は牧草を求め他人の土地とｺﾝﾌﾘｸﾄを生じるので戦うことが必要＝野蛮性が必要、ちなみに、「牧畜」は定住民による柵内での家畜の飼育
* 遊牧文化は「放し飼い」が基本なので子どもに教えるべきことはほとんどないため「教育」と親和性が少なく文明（知性と道徳）が根づきにくいのではないか、これに対して農耕文化では農業技術の良し悪しで収穫量が増減し、その技術を子どもに教える必要があることから「教育」と親和性があり文明が根づきやすい

CiNii論文ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽの検索結果から

1. ＠佐藤達全「他者依存の自己意識と日本人の倫理観について」育英短大研究紀要 第26号 2009年2月

* 和辻哲郎の倫理思想＝「人と人の関係における倫理」が仏教由来のものであることを示し、その中核となる「縁起」が説明されている、「縁起」とは他によって起こるという意味ですべては他に依存しているという考え方
* 言語学者･鈴木孝夫は家族内での人称が最年少者を基準として「他者依存の自己規定」になっていることを示しているが、これは日本における自己が他者との関係において規定されていることを示している
* 日本人の倫理観も他者に依存した倫理観であり、したがって他人に見られていなければ悪事をしてもかまわないという考え方が出てくる（「恥の文化」を倫理学的に説明すると「他者依存の自己意識」になるのであろう）
* 和辻哲郎と鈴木孝夫はさらに調べる価値あり

1. ＠藤江邦男「日本における技術者倫理と事故の事例学習」工学教育（㈶日本工学教育協会）49巻2号　2001.3

* 技術者の倫理教育には事故の事例学習が有効、米国では大学の教材として事例集が出版されている→日本では技術者の倫理教育が遅れているよう
* 本稿に掲載の事例は1999年の首都高道路標識ポール破損落下事故（規格外のﾎﾟｰﾙ）と2000年の雪印食中毒事件（売れ残り品を再利用）

1. 🕮高橋 靖「[ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽについての一考察--法と道徳論、応用倫理学およびCSRを中心に](http://ci.nii.ac.jp/naid/40017032334)」甲南法務研究 (6), 63-88, 2010-03

* コンプライアンスが求められるようになった歴史の説明にはじまり、道徳とはなにか、倫理とはなにかにつきアリストテレスやカント等々の説を紹介するもの、参考にならず

1. ＠岡本 浩一「[講演 ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽ問題への社会心理学の貢献」 (第21回 産研ｱｶﾃﾞﾐｯｸ･ﾌｫｰﾗﾑ 企業の「社会的責任」を考える)](http://ci.nii.ac.jp/naid/40020050385) 早稲田大学・産研ｱｶﾃﾞﾐｯｸ･ﾌｫｰﾗﾑ (21), 75-96, 2013

* 未読
* 東洋英和女子大教授、裏千家茶道専門学校理事、以下は関係ありそうな本
* (1)「職業的使命感のマネジメント ノブレスオブリジュの社会技術」（新曜社）、(2)「無責任の構造」（PHP新書）、(3)「権威主義の正体」（PHP新書）、(4)「会議を制する心理学」（中公新書）、(5)「会議の科学 健全な決裁のための社会技術」（新曜社）、(6)「属人思考の心理学 組織風土改善の社会技術」（新曜社）、(7)「ﾘｽｸ心理学」（ｻｲｴﾝｽ社）、(8)その他茶道関係
* 論文はCiNii論文ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽの著者検索で20件程度あり

1. ＠新田 健一「内部告発の社会心理学的考察 (特集ｺﾝﾌﾟﾗｲｱﾝｽと労働関係)」 日本労働研究雑誌 46(9), 24-32, 2004-09

* 「組織とエリートたちの犯罪 」の著者
* 未読

1. ＠名古屋工業大学の定期刊行論文集「技術倫理研究」第1号～12号最新号

* 未読

1. ＠「日本経営倫理学会誌」日本経営倫理学会　1994年～2016年最新号

* 未読

1. 🕮篠田 東洋児「[コンプライアンスと技術者の倫理観」](http://ci.nii.ac.jp/naid/10018311779)自動車技術 60(10), 2-3, 2006-10-01

* 都立図書館にあり、未読

以上